

浮世絵の美

その十九

詩人・専門学校西日本アカデミー校長 各務 章

前号で浮世絵春画の毛書き、そして毛刷りの精密さについてふれておいた。

浮世絵の中では、風景画と人物画（美人画、役者絵）があるが、春画（枕絵）が最も秀れた芸術性を具えていると私は説明しておいた。それは何故なのか。勿論、浮世絵研究家の中では、この事は既に語られている。しかし、今一度述べておきたい。

春画は男女の性行為の姿をあからさまに描いて完成する。この交接の形態はデッサンの技法でも相当に困難な表現法である。しかも性行為の型は、「四十八手裏表」と俗説にあるように様々な態位が古来からあって、その一つ一つを描く事は、大変な作業である。この型を絵師たちは、あく

事なき究求心で描き続けている。驚くべき研究心であり情熱である。この性交図の四十八手については又後日述べてみたい。

この春画を版画として完成させた点からも更に芸術性を高める結果となっている。

これは秀れた木版技術を駆使した豪華な多色刷りによって、世界でも例を見ない華麗で、情緒的、色気溢れる錦絵が完成していったのである。

この事は世界の印刷美術的観点からも突出していて、「春画を見ずして浮世絵版画の技術水準を語る事は不可能」と言わしめる所以であろう。

前号で述べたように、単に男女のからみの構図のすばらしさだけでなく、その舞台装置のリアルな描写と、衣装等

務 章

に見られる年齢層や階層、職業種別の描き分けの美事さは驚くばかりである。

舞台装置の中には、川の流



れや櫛や家屋のたたずまい等、上げればきりが無い風俗資料が描き出されている。

春画、枕絵を見ずして浮世

絵は語れない。と言うのが、私の主張してやまない理由である。

誂紳士服のタケハラ
川端通り二七二九八一

箱枕、括り枕については既に説明した。

今回は夜着や蒲団、煙草盆、行燈、鏡、懐紙、皿、小鉢、キセル等について見てみよう。

蒲団は江戸時代では敷き布

事である。

それまでは上蒲団に代わるものとして夜着をかけて寝た。

これは袖のついた大型の丹前と同様なものであった。日常着ていた着物を上にかけて寝ていた名残であったと説明されている。

春画に登場する夜着は殆どこの類である。

懐紙は、大型のチリ紙のようなもので、どの春画にも、たった今使用され、まるめられたとおぼしき懐紙が男女の周囲に置かれている。愛のいとなみの証拠がリアルに描き出されていて悩ましい限りである。

こんな状況を描いた絵は海外のエロティックアートには見当たらないのではないか。

また、皿や小鉢、徳利や箸等、日常生活の具体的食器類も精密に描かれていて、江戸庶民の一日のワンカットが見られて楽しい（上図参照）。

この他に小道具として琴や文机・文箱・行燈・鏡等が数多く描かれていて、これらをつぶさに観賞する事も浮世絵の

楽しみ方の方法ではないだろうが。

又、浮世絵の中で見落としてはならないのは男女のからみの中で肢態だけではなく、顔と顔の出合いの表情。そして更に妖艶な雰囲気としてのキスの描写である。

動物の中でも口を近づけてる動作を見る事はできるが、唇と唇を近づけ、その先まで進んで舌をさし入れる姿までの交情形は、人間だけであろう。しかも国の内外を問わず、万国共通なもの、このキスのあり方ではないだろうか。

江戸浮世絵にも、この描写が数多く出てくるので、それを見逃さずに鑑賞されるのも又一興であろう。

ここに浮世絵の中で、キスの大寫しの部分を紹介しよう(下図参照)。

国貞の「吾妻源氏」一図の中で、男が女の口に舌をさし入れている絵がある。愛し合った男女の心の交流がこのキス

によって表現されているように描写されている。

この場合、男女ともに目を開いて見つめているのも珍しい。通常は女の眼はうつとりと閉じたままが普通の情景で



ある。しかし、若いこのカップルは、お互いを見つめ合うことで、愛を更に高めているようにも受け取れる。絵師の観察の鋭さであろうか。ずっと古く菱川師宣(一六

四〇年代—明暦時代・彼は歌麿より約一〇〇年前)、彼の初期の枕絵の中に、唇を合わせた絵があるが、木彫りも不十分で髪は直毛で幼い。しかし口うつしに舌をのぞかせているのが見られるので、この時代既にキスはあったと思われる。

しかし木版画錦絵の始まった鈴木春信の時代(七二二年・享保七年)以後、歌麿・北斎・英泉・国芳・国貞(二七四〇年、一八〇〇年代)には、細密な木版画が隆盛となり、毛彫りからキスまで美術的にも秀れた浮世絵となってきた。

口を吸うのは、愛情の交換として、自然の行動であり、映画のラブシーンでは必ずと言っていい程、このキスシーンが映されている。

又、男女に限らず、親愛の印として、頬にキスをするのを習慣としてる国や民族もある。

る。こんな風に親密さを表現するのは必ずしも失礼な事ではない。したくなければしないで肩を抱き合うか、握手だけでもいいのである。

いずれにしても人間の交際の中で身体をふれ合うことは動物的生活の要件であるに違いない。

しかし、性風俗の中の肉体の接触、特に口を使つての交情は、又特別な形に育まれてきた。

浮世絵春画の中のキスシーンがそれであり、情愛の極限として性器へのキスがある。諸外国の例を見ても、フランスでは「ソワサンヌーフ」と言う語が性行為の中で使用されている。69の数字である。

これは数字を人間に例えて考えれば判ることで、男女がお互いに反対方向に横たわる、あるいは上下に重なっている形である。

その形だと、お互いの顔が相手の下腹部に当たることになり、これを具体的な性行動に移せば、お互いに相手の性器を口で吸い合う事となる。

汚い事だと言えどもそれまでだか、人間全て、女性のその部分から誕生している事を考えれば、必ずしも汚い事とは言えないであろう。

歌川国麿の艶本「色道十八ヶ条」中巻(一八五三年・嘉永六年)にはこの69の形の枕絵の中でも巨根のデフォルメとして登場する、英語でも「big dick」と言われる姿である。男の上に女が重なり巨根が松の根本のように直立しているのを、女が口でなめている。一方で女性の男が吸っている肢態で、これは、やや誇張が過ぎているが、男女の交情の情景としては、やはり秀れた春画だと言えよう。

この方法について、江戸の粋人は色々と工夫して造語を作っている。男の一物に口を当てる場合は「尺八・舌人形・床柱」等と言ったが、明治以降は「ハモニカ」等呼んでいる。逆の場合は「豆吸い、豆もみ」等良い表現とは言えない。私だったら「森の散歩」位はつきたい所である。

〓 つづく 〓